

「本当にこの子は礼儀を知らない子ね。お退きなさい」と言って、姫は自分の上に乗っている『のら』を突き飛ばした。「ちよっと面白そうな指輪ね。もう少し調べたいわ。私に頂ける」と言った。「ただとは言わないわ。代わりにこのダイヤの指輪をあげる」と言っつて、姫は自分の指輪の一つを外し、『のら』に渡した。『のら』はその指輪を見て、「ガラス、ガラス、『のら』の宝物を返して」と言っつて、また姫にしがみ付いた。「しつこい子ね。じゃ、サファイアに、ルビーに、エメラルドもあげるわ。これでいいでしょ」と言っつて、『のら』に手渡した。『のら』はじつとそれらを見ていた。「色々な色、綺麗、綺麗と言っつて、見詰めていた。姫は「がめつい子ね」と言っつて立ち上がった。「じゃ、私は帰るわ」と言っつて、部屋を後にした。その時『のら』の鈴が「コロコロ」と音をたて、わずかに光ったように思えた。

姫は待たせてあつた車に乗り、「家に帰るわ」と運転手に告げた。車がゆっくり動き出した時、家の中から『のら』が再び現れた。そして「これ、返すから『のら』の宝物を返して」と言っつて、車を追いかけ出した。姫は運転手に、「早く行っつて」と催促した。車と『のら』は徐々に離れていく、しかし『のら』は珍しくあきらめずに、姫の車を追いかけて続けた。『のら』の姿がほとんど見えなくなったその時、突然車が止まった。「どつしたの」と姫が叫ぶと、「踏み切りです。電車が来るようです」と、運転手が答えた。なかなか踏み切りの遮断機が上がらない。その時車の窓ガラスを叩く音が聞こえた。窓の外には薄汚れた『のら』の顔があつた。



©Benjamin Roots